Nara Women's University

コロナ禍下 2020年度の一回生担任を振り返って

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部 公開日: 2022-04-15 キーワード (Ja): コロナ禍, 一回生, 担任 キーワード (En): 作成者: 尾山,慎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5746

コロナ禍下　2020年度の一回生担任を振り返って

尾山　慎（奈良女子大学研究院人文科学系准教授）

1．「コロナ渦」の二年間とそのはじまり

相変わらずの「コロナ渦」……ネット上に時々見られた誤記である。「禍」という字を「渦（うず）」と勘違いしていることによるものだ。ただ、この誤記、「昨日から*核（ただしくは「咳」）が止まらない」などの誤記と違い、案外、意味として符合しあうところもあって、たしかに、もはや「渦（うず）」なのではないかとさえ思えてしまう。もっとも、一点に吸い込まれていく「渦」ではなく、外へ外へと広がっていく逆流の「渦」なのかもしれないが。

ごく個人的な範囲で、筆者自身が経験したコロナによる催し等の中止は、2020年2月中旬あたりだった。その後の3月入ってすぐの頃に予定していた北九州の大学での研究会を、コロナ感染拡大が見通される為に中止することになったのであった。学会でふだんからつきあいがある、専門の興味が近い研究者数名が有志で集まる小さな会で、小さくかつクローズドだけに、挑戦的な発表や中間発表等も許容され、勿論、発表後は濃密な議論もできるとあって、本当に楽しみに自身も研究発表の準備をしていた。半年以上前から計画していたので、コロナのコの字もなかった頃は、小倉の地で充実した研究会のあとに一献酌み交わして、鮮魚に舌鼓を打って後一泊…などということまで細やかに夢想したものである。しかし、実際には、およそ二週間後頃に迫っていたこの会をやはり中止すべきなのではないかと、相互にメンバーから提案されるに至ったのだった。このとき、ZoomやSkype開催という提案が誰からも出ていないのだが、これには、時期からして多くの方が首肯してくださるのではないかと思う。ZoomもSkypeも、ツール自体はすでにあったが、筆者もメンバーも、Webで開催するという発想がなかった。後から振り返れば、このZoomを毎日のように駆使する生活が、実はもうすぐそこまできていたが、2020年2月中旬、まだ、それを想像することはできなかった。

2．〝担任メールセンター〟

2020年4月、まだまだ慣れないマスク必須にて、新入生Eクラス19名に対して広いN101教室が振り当てられ、筆者にとっては、前回以来6年ぶりの一回生担任が始まった。しかし、おそらく求められるのは、ごく手短かな各種説明と、簡単な自己紹介。マイク一つ回すのにも気を遣ったが、新入生の声を一言も聞かないままで終わるわけにはいかない。ただ、そもそも顔の半分は隠れていて、覚えようもない。

そのガイダンス日からほどなく、ただただ、鹿達が草を食む閑散としたキャンパスの風景、静まりかえった各棟内廊下のひんやりとした空気――脳裏に焼き付いている方も多いことと思う。本を取りに行ったり、コースの臨時Web授業受講室の設定などで訪れては、本当に、えらいことになってしまったと思ったものだ。

ところで、一年後ふたたび次の一回生の担任をすることになったが、あきらかに2020年4月のほうが緊張度と不安が大きかったように思う。2021年の夏頃に、「自粛疲れ」「気の緩み」なる言葉がよく叫ばれたが、2021年4月の新入生（現一回生）は、コロナ禍下で、高校生活や予備校生活を送ってきたこともあってか、そして筆者自分自身も含めて、妙な言い方だが、どこか〝ある種の余裕〟を感じる、入学ガイダンス日だったと記憶している――ようするに「慣れた」ところもあったのであろう。それが良いことか、良くないことかは、俄に断じられないが…。同じように全員マスクをし、私語を慎んで衝立の向こうに座っているのに、一年前と違う空気や雰囲気を思わずしらず引き比べつつ、1年ぶりの新入生クラス別ガイダンスを始めたことが、印象に残っている（感染状況としてはむしろ2021年春以降のほうが猛威と呼ぶにふ

さわしいものであった)。

さて、時間を再び2020年4月まで巻き戻して――筆者は新入生ガイダンスの日から、7月上旬の学情センター情報リテラシー講座に同行するまで、新入生達にじかに会うことができなかった。学期開始の最初はオンデマンド形式で、メールを利用したフィードバック等で対応し、Zoomを導入したWebライブ授業はGW明けからはじめることにした。結果からいうと、こちらのほうが自分としては性に合っているように思えたので、7月までこの形式を続け、他の担当授業も含めてオンデマンド形式は全てやめることにした。

一回生達は、大学という初めての場所で、高校までとはおそらく異質（異次元）の授業や課題に、徐々に疲弊していった。毎年多かれ少なかれ、新入生というのはある種のカルチャーショックを大学という場所で受けるものだろうが、なにせその大学に足を踏み入れられないというこの世情である。ことに人生初めての一人暮らしを始めた学生の不安などは、察するに余りあるものだった。過重との声が上がっているので課題をもう少し軽目にすることの検討をと、文学部全体にお願いのアナウンスがあったこともご記憶の通りである。一回生達の間では、それら課題そのものもさることながら、春先からしばらく、あまりにも授業ごと（担当教員ごと）に形式がバラバラで、Zoom、Slack、Cisco WebexなどのWeb会議ツールはもちろん、各種連絡系統も一定しておらず、課題や指示を見落としたり、混乱したりするケースが目立ち始めた。かくいう筆者自身も、上述のように、GW明けには早、オンデマンドからオンラインZoomライブ授業へと宗旨替えした一人であった。

2年近く経った今振り返って、学生教員双方が五里霧中で手探りの中、〝仕方なかったこと〟というのは多々あったとは思う。ただ、「2020年」というとある年も、「大学一回生」というものも、当たり前だが、そのときのその時間、その一回だけだから、「仕方ないこともあった」という言葉だけではおそらく片づかない。したがってその言葉をぐっと飲み込むべきような、しかしまた偽らざる事実でもあるだろうといった、なんとも複雑な葛藤を孕んだ思いにとらわれる(当時の一回生の具体的な声の一部は、本誌の前号にまとめられているので、是非ご参照されたい)。なお、連絡・指示系統について、後に、情報の一括化、一元化として是正されていったことは、各位ご記憶の通りである。現場や学生の声をくみ取り、できる限り迅速にと主導、実行してくださった、関係の先生方、職員方には、この場を借りてあらためて感謝申し上げたい。

以上のような事情から、とりわけ4月はコールセンターならぬ〝メールセンター〟よろしく、担任する学生達の問いあわせに応じたが、筆者が自分の判断で回答できる内容ばかりでは勿論なく、どちらかというと、中継・仲介が主な役割だった。その、連絡の橋渡しにしても、教員職員側は当時はことに日々手探りの中忙殺という事情があり、一回生は一回生で、情報の散らばりや、常に「何かを見落としているのではないか」という不安に苛まれて、そこへきて授業担当者と連絡が付かないなど、もはや決死のSOSなわけである。これは当時一回生担任をされていた先生方はじめ多くの教職員の方もご経験のことと思う。筆者にとっては教職員、学生双方の事情が見えるだけに、なんともいたたまれないことも多く、せめて仲介役として、中身がない連絡だけの文面であっても、即座にマメに返事するようには心がけた。

昨年度末、つまりこの一回生達が1年を終えようとするとき、筆者が1年最後にと挨拶のメルマガ（次節にて紹介)を送った際、ある学生がレスポンスをくれ、そこには、昨年の4月頃、課題の提出を巡って不安の極致にあったとき、「もうちょっと待っててくださいね」と一通メールでつないでくれるだけで、安心して、その日は寝ることができたという感謝の言葉があった。そのように言ってくれて報われるような思いもあった一方、やはり、寝ることができたという言葉にはあらためて衝撃を受けるばかりであった。真面目に、真摯にすべきと思う故に、悶々と思いを巡らしては、眠れぬほどに不安と心配を募らせる学生がいる――つくづく、課題を出すことの責任を思った。

3．メルマガ発行

通常であればガイダンスを終えて、数日後には学期がはじまり、最初の火曜日や金曜日に、早速クラスごとの「基礎演習」という授業が開講される。原則全員がこれを受講するので、担任は毎週担当するクラスの学生にじかに会い、授業を通して対話し、顔を、そして名前を覚えていく。履修相談や、課題を巡る事

務的なことなど、授業後にちょっとした立ち話で相談をうけることもできる。4月も中旬から後半にかかると、土曜日あたりに、近隣の散策にでて、お菓子等を買い込んで茶話会を開き、すっかり打ち解けた様子のクラスの面々を眺めることになる――はずの、こういったことが、どれも全く叶わなくなってしまったのが、二年前の春であった（翌年の春も、事実上これに近いものだった）。

筆者は、担任でありつつも、担当する新入生の顔と名前も一致しないまま、まったく没交渉のようになってしまうことをなんとか避けられないかと思索した。顔を覚えられないのはもう仕方がないから、せめてもの〝繋がり〟としてメルマガなるものを刊行して、とにかく発信し続けるのはどうだろうかと思い立った。一方通行ではあるが、それをいわば逆手にとって、毎日のように担任からの何か発信（言葉）を続ける。ならば、常に〝オンライン〟のようなものであって、困ったとき、疑問があるときはとにかくここに聞こうと思ってくれるだろうと考えた。第一回目は記録を振り返ると4月8日に送信し、「演習とは？」と題して、今後、対面できない代わりにメルマガを配信するというお知らせとともに、大学の「演習」なる授業形式の紹介をまとめたものを送っている。細々と続けて結果、年度末までで発行総数はのべ179回になった。おおよそ2日に一回送ったことになる。学生達にとって、反応を返さなければという圧になってはいけないと思い、常にメルマガの題目には、

メルマガ25【奈良女子大学Eクラス】「　題名　」
※返信不要

と、返信や反応はよこさなくていいことを示した。ということはもう読まずにそのままの学生もいるだろうから、大学からの情報、担任からの事務連絡等は、基本的に別メールとして分けて送るようにした。

筆者の専門分野は言語（日本語学）や古典文学、歴史学的文献資料等を対象とするものなので、その話題が多くなったが、全員が言葉や古典に興味があるとも限らないし、専門だけについつい細かく、長ったらしいものになる憂いが自分でもあったため、幅広く人文学や、あるいはときに自然科学も含めて話題にしてみた。口調はですます調にし、読んでいて煩わしいだろうからあまり細かくは出典や注記を記さないことにした。いわば、寝転んでスマホなどでさらっと2～3分ほどで読めて、そして「へぇ」と思ってもらえればそれでいいというようなところへ、照準をあわせた。ところで、本稿のような、学生生活サポートや教育に関する活動報告を記すものにおいては、その学生達の生の反応の数々を、FDのような意味でここに紹介できればいいのだろうが、反応しなくていいといったので、当然、筆者の手元には今ほぼそれがない。ただ、後々、読んでくれてはいたことを、ときどき二回生にあがった学生から聞くこともあって、筆者自身としては非常に（自己）満足している。

頻度は、夏休みと冬休み、そして最後の春休みは一週間に2～3通ほどにとどめ、学期中も土日祝日は休んだ。つまり、平日はほぼ毎日送ったことになるが、さすがにネタが尽きてくるのを自分でひしひしと感じたし、書いてはみたもののあまりに薄い情報だったのでその日は送らなかったこともあった。またどれほど専門でも毎回毎回言語の話ばかりが続くと、書いていて自分でも退屈してくる。そこで、いままでまともに調べたことや、詳しくは知らなかったこともじっくり調べて、知ってみようというわけで、自分にとってもあらたな挑戦となった。それに、高校を卒業したばかりの学生達に、「構造主義」とか「表意性」とかいった専門用語を、読みやすい身近な喩えなどに頼ってどう簡潔に伝えるかという模索は、それこそ教室における対面で、長い時間をかけて詳細に説明するよりも、遙かに難易度が高いことだと思い知った。仕方なく2通に分けてみたり、シリーズものにしてみたりもしたが、そういった長編は、〝既読率〟や〝完読率〟ははかばかしくなかったかもしれない。

ところで、読んでも読まなくてもいいし、まして一々反応をよこさなくて良いと言ったのは、実は、低調な反応や不評ということをこちらが知ることもないので、それはそれで自身もモチベーションを一定させられそうだと思ったことにもよる。概していえば、〝勝手な使命感〟〝自分の知識の補充欲〟〝始めた以上、途中で辞められないと意地になる〟〝自己満足〟…どうしても、複数列挙されてしまう――が、どれも、自分にとって偽らざる感慨であって、これらの集合体のようなエネルギーに突き動かされて、日々、送った。ただ、没は免れたものの、旧Eクラスのみなさん

には申し訳ないが、駄作、駄文の回もおそらくあったとおもう。嘘は書いていないにしても、いま読み返してみても、いささか苦しい話題や文章もある。

以下、ずらずらと並べることになるが、記録もかねて表題だけ列挙しておきたい。一貫性はほとんどないが、時事ネタや季節に関連しているテーマにしている時もあった。メルマガの利点は、授業中だったら、たとえ余談にしても脈略がなさすぎて持ち出せない話題（しかし、大学生なら知っておいて欲しい事項）を発信することができるという点が挙げられるかと思う。

先にも述べたとおり、時々、何か「ひっかかり」を覚えてくれればと思って送っていた。メルマガを読んだことで、後々、いつの日にか、「あ、なんか聞いたことある」とか「誰かの話でそれきいたことあったような」……と思い出してくれること――〝ひっかかり〟というのは、その程度の意味である。それまで全く聞いたことも見たこともないというのとはきっと違う、何かの起点になるかもしれないというところを期待した。あと、もちろんだが、「ああ、この話はもう知ってる」という感想であっても、それはそれでいいことだろうと思った。

演習とは／日本語の微妙な違い／国文小咄／おすすめの本／「彼にあった」と「彼とあった」の違い／国文小咄その２／認知言語学／中国の簡体字／認知言語学その２／「どれほどのものを見過ごしている？」／横井小楠／本居宣長／「要領の悪い人に苛つく？」他／メタファ／モラリティのメタファ／グリムの法則／四月を振り返って／古今集以降の和歌をカスと切って捨てた正岡子規／ワーキングメモリー／英語力と伊藤博文／ミシェル・フーコー１～３／「大丈夫」の多義／「私的には」／アンドレ・ブルトンの添削／名言集マザーテレサ他／敬語の歴史／「知らない人が私に話しかけた」はおかしいか／マルクスとマルクス経済１～４／紫式部伝／中国語と漢字／連想と比喩／言語の生産性と定式性／流行語／「消誤無（ケシゴム）」なる表記／漢字の造語力／英語の綴りの難しさ／ニーチェ１～４／校正とは１～２／省略語／翻訳語／文化とは／ロラン・バルト１～４／「調べる」とは？／「談話」とは／方言の歴史／おすすめの本その２／方言　続き／「〇〇女子」／レヴィ・ストロース１～４／Twitter名言集／離れた知識の出会い／迷惑受け身／仏教伝来１～５／「普通に」という言い方／おすすめの本その３／お盆／二宮尊徳／「鳴かぬなら・・・」の歌／君が代／二義文／ブラックイズマターという言い回し／進化論の歴史／英語の語構成／「一杯のお茶」を巡る学問の多様／数字の表記の取り決め／世界の挨拶言葉／ラカン伝１～３／日本のアニメ／科研費／バーチャル方言／和歌と日本人１～５／世界の名言その２／創作物におけるスマホ封じ／電話今昔物語／フロイト１～３／「鬼滅の刃」と「キメハラ」／「〇〇ないなんて人生損してる」という言い方／表現の自由／最近の面白ツイート／イスラム教１～７／「課金」／アルベール・カミュ／ディスる／神はサイコロを振らない／湯川秀樹／夢見１～４／「師走」１～２／地元の名物／落語「鹿政談」／胃腸の日／インド１～５／日本昔話／「鬼」／「鬼は外」とサンタ／「掃除」／よいお年を／新年の挨拶と言葉／牛は海老／菊池寛／卒業論文／「歯」／コロナ「渦」／ギョエテって誰／阪神大震災から26年／外国語の氾濫／「科学する」という言い方／プライバシー／近所づきあいとお葬式／菊池寛とマスク／「パソコンが重い」／日本語が通じない／節分巻き寿司／「ぴえん」と「ぱおん」／文学の力１～２／ス敬語／ジェンダー論授業担当の思い出／ＡＩの言語能力／「オワコン」になっていくもの／ひろゆき氏「古文・漢文オワコン」論について１～２／科挙／両立できない教え／卒業／ツイート集／１年最後のご挨拶

このほか「お寺の業務と役割」「真言宗の修行」「大学院で学んだこと」などいくつか不定期でシリーズとして

４．おわりにかえて――顔が見えず、反応が見えないことからの新たな機運

Zoomライブ授業にも慣れてくると、受講生はマイク・カメラoffゆえに、〈顔は知らないが、名前だけは漢字一字一字フルネームで刻み込まれる〉という、教師としては実に不思議な現象が脳内で起こり始めた。顔や反応が見えない――極端な話、PCの向こう側には誰もいないのかもしれないし、メルマガも、誰も読んでいないかもしれないと思ったりもした。一人もということはさすがにあり得ないと思うが（多分）、期待ほどには伝わっていないかもしれないことがふ

と気になったりもした。しかし同時に、Webツールや、顔が見えない一方通行にも〈良い面〉〈使える〉ことはあると、次第に感じるようにようにもなってきていた。メルマガも、もしコロナがなくて通常の担任だったら、おそらくしていなかっただろう。だからこそ、メルマガでこそ伝えられたこともあったとしたら、幸いに思う。

「アフターコロナ」なる言い方がある。「アフター」と呼べる時期が訪れるのは確かに望ましい。ただ、そのような時代には、対面でやることの方に理由説明が求められるようになるともいう。いまは、言葉の上でも「対面」―「Web」といった対立構造を形成しているが、有標（marked）で言葉を冠するのが「対面」の方だけになるというのだ。つまり「話す」といえば自動的にWebとかバーチャルのほうであって、そちらが無標（unmarked）になる日が来るともいう。それを聞いたときには、少なからず驚きを憶えつつ、俄に同意し難い思いであったが、たしかに、2022年現在世間の一部では本当にそのような場面があるのも事実で、筆者自身がまさにそれを経験もした[1)]。

Webツールの有用性で一番わかりやすいのが、Zoomの録画だろう。授業を最初から最後まで録画して、来られなかった学生に共有できる。もっとも、いまだに自分で自分の授業動画をおよそ見返す気がしないのだが、最初の頃、休んだ学生に共有した際には、随分と感謝された（そのうち、それこそ当たり前になってきたのか、「動画ないんですか？」というストレートな問い合わせがくるようになったけれど）。確かに2019年以前には、とても考えられなかったことだ。授業を休めば、多くは、残念ながらただそれで終わりだったから。その学生が、Zoom録画をもって休んだ分をいくらかでも取り返せたとしたら、幸いなことであるに違いない。やむない選択というところから始まった方法が、どのような効果を生み出していくのか。まだ結論めいたことをいうのには早いかもしれないが、前向きな側面の方をも期待しつつ、注視を続けたいところである。

それにしても、誰にとっても本当に不自由で、不安で、不満が募る二年間であったと思う。今これを執筆しているのは2021年立冬の頃で、日本全国の感染者数は拍子抜けするほど日々減っていっている。しかし、もうだまされんぞという気分である[2)]。ホッとはするが、さすがに2年間これだけアップダウンを繰り返すと、ああ終わったなどとはとても思えない。本誌が刊行されるのは、桜花爛漫で新入生を迎えるその目前という頃になっているはずだが、状況はどうだろうか。真の出口は一体どこにあるのだろう（と、執筆時現在、思っている）。それでも、奈良女子大学のこの、かつて経験したことのない二年間もまた、当時、そして翌年度の一回生達をはじめとする学生、院生達にとって一つ一つが小さな養分となって、振り返れば成長の一因にきっとなっていてほしいと願う。無論、筆者自身においても、そう願う次第である。

注

1）2021年5月頃、本学の広報関係の業務をした際に、受験生のサポートや情報提供・発信をしておられる外部企業の担当の方とメールでやりとりをすることがあった。その最初のメールに、「先生のお話を是非直接伺いたくおもっております、その際、当社よりもう一人参加させていただきます」とあったので、対面かとおもって、防疫の体制を整え、広めの空き教室を確保するようにしますと返したら、予想に反して、申し訳ありません、ことばが足りませんでした、Zoomでお願いいたしますとお詫びメールが来た。いわく、先方はZoom取材かメール取材かという二択のうち、前者を「直接話を伺う」という意味で述べていたということである。たしかにメールに比べて〝直接話を伺う〟には違いない。担当の方にとって、「直接話して取材する」のディフォルトは、対面ではなくWeb（Zoom）の方だったのである。

2）2022年1月からオミクロン株が大流行し、連日、「過去最高感染者数／１日」とのニュースが流れている（初校時に記す）。